

令和2年度第2回
東京都総合教育会議議事録

日時：令和2年9月10日（木）10：30～11：30

場所：都庁第一本庁舎42階特別会議室B

○藤田教育長 皆様、おはようございます。ただいまから令和2年度第2回東京都総合教育会議を開会いたします。

今日は、テレビ朝日外7社からの取材と、7名の傍聴の申込みがございました。これを許可してもよろしゅうございましょうか。

(「結構です」の声あり)

○藤田教育長 ありがとうございます。それでは、入室を許可いたします。入室してください。

(報道関係、傍聴者入室)

○藤田教育長 それでは、第2回総合教育会議の開催に当たりまして、小池都知事より御挨拶を頂戴したいと思います。

○小池知事 皆さん、おはようございます。東京都知事、小池でございます。東京都総合教育会議の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

本日、御多用のところをお集まりいただきましたこと、まずもって感謝申し上げます。

また、教育委員の皆様方には、日頃から東京の教育の充実に多大なる御尽力を賜っております。重ねて御礼を申し上げます。

さて、前回は5月5日に教育会議を開催いたしました。正にコロナ禍の真ただ中であつたわけでございますし、今も引き続き戦い続けているという現状でございます。また、このコロナ禍は多くの変革をいや応なしにもたらしました。例えば学校の長期休業、オンラインでの授業、これらのことは、これまで考えられなかったようなことが一瞬にして行わざるを得なくなったということでもあります。また、それらの挑戦が、またそれらのせざるを得ない状況が、また新たな日常、新たな教育の在り方なども提示しているのではないだろうかと思うわけでございます。

都は先日、都政の新たな展開について、「新しい日常」、そして「サステナブル・リカバリー」といった新たな視点から、これまでの戦略をバージョンアップしていくことを公表させていただきました。

教育の分野においても、子供たちが自らの力で未来を切り開いていけるように、一人一人の個性、成長に応じてきめ細かなサポートが必要であり、また、能力を最大限に伸ばしていく質の高い学びの実現が求められております。

そして、前回の5月の会議でございますが、新型コロナへの緊急的な対応についての意見交換を行わせていただき、また、今後の東京の教育の在り方の議論もその場でさせていただきました。

そこで、今回であります、都政の構造改革を進めていく中で、引き続き皆様方と新たな東京の教育の在り方について議論を更に深めまして、これからの東京の教育の基本的な方向性を示す、そのための東京都教育施策大綱の策定につなげていきたいと考えております。

そこで、今日は、教育の分野で大変先駆的な取組を実践されておられるお二方のプレゼンターをお迎えいたしております。まず、AIドリルを開発されて、教育にICTを積極的に取り入れてこられました神野元基さん、よろしくお願ひいたします。また、子供たち一人一人に応じた多様な学びの場を創出してこられました西野博之さん、このお二方にプレゼンテーションをお願ひいたしております。

言うまでもありませんが、教育とは未来への投資であります。現在のこの難局を乗り越えて、そして未来の東京を切り開いていくためにも、皆様方からのきたんのない御意見をいただければと存じますので、どうぞ最後までよろしくお願ひいたします。

ありがとうございます。

○藤田教育長 ありがとうございます。

それでは、早速でございますが、本日の議題に入ります。

ただいま知事からお話がございましたとおり、本日は、新たな東京の教育の在り方につきまして皆様と幅広く意見交換をしてみたいと存じます。

初めに、御出席いただいております2名のプレゼンターを改めて御紹介させていただきます。

まず、株式会社COMPASS、ファウンダーの神野元基様でございます。神野様は、子供たちに効率的な学習を提供するAI型タブレット教材「Qubena」の開発に携わり、現在は同社のファウンダーとして教材の普及・啓発に努められていらっしゃいます。本日はどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

お二方目でございます。認定NPO法人フリースペースたまりば理事長、西野博之様でございます。よろしくお願ひ申し上げます。西野様は、不登校や障害、貧困、虐待等の理由で学校や家庭、地域に居場所を見い出せない子供たちのたまり場をつくり、多様な学びの機会を提供されております。西野様からは、昨年度の第2回総合教育会議のテーマでもございました「これからの特別支援教育の在り方」の流れを踏まえましてお話を賜ればと思います。本日はどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

それでは、お二方のプレゼンテーションに先立ちまして、私の方から若干報告をさせていただきます。前回、5月5日の令和2年度第1回総合教育会議の話題を踏まえまして、この間の都内公立学校におけるオンラインを活用した取組事例について、それからもう1点、有識者及

び子供たちへの意見の聞き取りを行っておりますので、その結果について御報告させていただきます。

画面の方を御覧いただきたいと思います。

まず、臨時休業中及びその後の各学校のオンラインを活用した取組事例についてでございます。

都内公立小・中学校におきましては、今年度末までに1人1台端末の整備がほぼ終わっていく予定となっております。それまでの間は、学校や都が貸出しをいたしました端末等を活用してまいります。

また、都立学校に関しましては、5月から全校へ学習支援クラウドサービスを導入いたしましたり、校内無線LANの環境整備等を行っているところでございます。

次のページを御覧ください。

臨時休業中、各学校では、オンラインを活用した朝の会や、動画配信サービスを活用しての授業、定期的な健康観察など、状況に応じてICTを活用したところでございます。上の段の左から2番目は、知事にもスペシャルゲストということで小学校の朝の会に参加していただいた状況でございます。

また、臨時休業明けから現在にかけては、欠席している児童への授業の配信や、3密を避けるために、同時双方向型ビデオ会議システムを活用した生徒総会の実施など、様々な取組が行われているところでございます。

続きまして、報告の二つ目でございます。有識者及び子供たちの意見についてでございます。

将来の東京の教育について、12名の有識者へは「今後の東京の教育の在り方」という形で、それから、子供たちへは「10年後の東京の学校の姿」という形で問い掛けをいたしまして、寄せられた意見についての御報告でございます。

まず、資料1ページ目は、御意見を伺った有識者の一覧をお示ししております。子供たちからは、インターネット経由のアンケートと、都立学校の生徒への聞き取り等により意見を集めたところでございます。有識者からは、学び方や教え方、ICTの活用、社会資源の活用というような、大きくくくりますと三つの視点からの御意見を頂戴したところでございます。また、子供たちの意見につきましては、小・中・高・特支、それぞれの校種ごとに整理いたしました。有識者、子供たちともに、児童・生徒一人一人の状況に寄り添った教育を目指すという点につきましては共通した問題意識、希望だったり、そういったこととして読み取れるところでございます。

2ページ目、3ページ目では、後の議論の参考となりますよう、それぞれの意見をお示ししているところがございます。後ほど御覧いただければと思います。

こうした御意見や、本日の神野様、西野様のプレゼンテーションを踏まえまして、新たな東京の教育の在り方の検討を具体化してまいりたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

御報告は以上でございます。

それでは、早速でございますが、本日の講師によるプレゼンテーションに入らせていただきます。

最初に、「ICTを活用した新しい時代の学校教育の在り方」について、神野様からよろしくお願ひ申し上げます。

○神野氏 よろしくお願ひいたします。初めまして。株式会社 COMPASS、ファウンダーの神野と申します。本日お時間を頂きまして、「ICTを活用した新しい時代の学校教育の在り方」ということをプレゼンテーションさせていただければと思います。

まず簡単に、私自身、これまで何をしてきたかということをお紹介させていただきたいのですが、2010年にシリコンバレーで起業いたしまして、この年、シリコンバレーの中でAIというのがものすごく騒がれた年だったのですね。それでもって、AIがもたらす未来として、2045年にもしかしたら人工知能一つに人類が勝てなくなる時代が来るかもしれない、正にシンギュラリティが起こるといふようなことが言われていて、そのときに私が感じたことは、そんな時代が仮に到来するのだとすると、当時の子供たち、例えば中学生とかは2045年で40後半ぐらいなわけですね。そのような子供たちにちゃんとこのことを伝えないと未来を生き抜くなくなるのではないか、そのような意識から、日本に帰ってきまして教育ということを始めました。

その教育現場の中で痛感したものが、子供たちには時間が残されていない。つまり、例えば中学生であれば、朝8時に学校に行き、部活動をやっている子は18時ぐらいまでそこにいて、その後、成績対策とか受験対策で塾に行ってしまうと9時ぐらいまで勉強しているわけですね。そのような中において、未来を生き抜く力ということはどうしても子供たちに伝えることができないという現状に出くわしまして、それでもって、何とかして子供たちにまず時間をつくらなきゃいけないという思いで、このAIドリルのQubenaというものの開発に着手いたしました。

その後、このような中で私の考え自体やっていたのですが、国もまた2016年にいわゆる

Society5.0 で、人工知能やI o T、ビッグデータを前提とした社会の中で各産業をどうしていくのだ、そのような議論があり、教育自体も変えていかなきゃいけないという中で、私自身、昨年から中央教育審議会の臨時委員という形で、新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会の中で委員もさせていただいております。

その新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会でも、新しい学習指導要領において、どのようなことを前提に Society5.0 の中でやっていくかということが集中して議論されていきました。その中で生まれたものが GIGA スクール構想というものになっていまして、もともとの GIGA スクール構想というものが目指したものは、公正な個別最適化ということです。今、このコロナ禍において、学びを止めないためにこの GIGA スクールを活用されているのですが、もともと本来の意味でいうと、公正な個別最適化を子供たちに施すということが、この GIGA スクールの本質的な意味でした。

では、公正な個別最適化とは何かというと、指導の個別化というものと学習の個性化、この二つになります。それぞれこの二つがどういうものかということをお後御説明させていただきます。

まず、指導の個別化ということは、いわゆる吹きこぼれと言われたり、落ちこぼれと言われたりする子供たちに対して、しっかりとその子供たちに対する進捗を最適化させるということが指導の個別化という意味です。今まででいいますと、どうしても構造上、学校の授業というのはずっと一律で、全員に対して同じ一斉指導を進めていくので、どこかで授業を休んでしまったりとか、どうしても理解できなかった子がそのまま置いていかれていっても仕方がない構造になっていた。若しくは、吹きこぼれと言われる方は、もう十分理解しているのに、みんなの進捗の中でやらなければいけないので、退屈な時間が続いてしまうということが構造上起こっていた。ここを何とか解決しようというのが、指導の個別化というものになります。

指導の個別化というものは、もちろん今までの先生の技術でもやられてきましたし、タブレットというものが登場し、いろいろな工夫というものがされるのですが、なかなか先生たちにタブレットだけをもたらずだけでは実現し得ない。ここを実現させるために大事なのがソフトウェアになります。タブレットにどのようなソフトウェアを載せることによってそれを実現させるかという中で、このAIドリルというものが今成果を上げつつあります。本日御紹介させていただきますのは、私が千代田区にあります麴町中学校で実証させていただいたAIドリル「Qubena」というものです。

どのような仕組みかということなのですが、例えば子供たちがどういう答えを書いて

きたかとか、何秒ぐらいかけて解いたのかということから、人工知能自体が、その子がどの概念はちゃんと理解していて、どの概念を理解していないのかというのを裏側で常に演算するのです。そうすることで、例えば何かの問題を間違えたときに、その子が分からないところにピンポイントで戻してあげたり、若しくは十分理解したりしているのであれば、どんどん前に進めてあげるといふことを行うのが、このAIドリルというものの仕組みになっています。

また、このQubenaが一つこだわっているのは、今までの学校教育の現場で子供たちが体験していた学習体験そのものをコンピューターの上で再現するということです。つまり、手書きですし、数学であれば、グラフを描くとか、コンパスを使うとか、そういうことも全部この上で表現できるということを目指してつくっています。また、今のところでいいますと、小学校1年生から高校2年生、数ⅡBまでをカバーしている教材になります。

このような教育をやっていると、子供たちが今何は理解していて、進捗はどうなっていて、何時間ぐらい勉強しているのかというのが全部データで残るので、そのデータをちゃんと先生側に見てもらおうためのQubenaマネージャーというものを同時に提供することで、子供たちのモチベーション管理ですとか学習の意欲・態度というところに先生が声掛けをしやすい、そのような形でこの学習空間ということをつくらせていただいています。

こちらからが、今、麴町中学校でやらせていただいた実証になります。2018年度に経済産業省さんと一緒に「未来の教室」実証事業の枠組みの中でやらせていただいたものです。

何を目指したかということ、従来の授業時数の半分の時間で同じような学習内容、同じような定着を図りつつ、新しく生まれた時間で次の学年の勉強をしたり、また、対話的で主体的なSTEAM教育ということを目指しました。そのような新しい学びをするための余剰時間をつくるということにチャレンジした、そんな実証事業になっています。

このような中で、一つ、やってみて気付いたことなのですが、QubenaみたいなAIドリルを導入したときに、子供たちの態度がものすごく変わったのですね。どういうことかということ、一斉指導を受けていると、子供たちは、分からない瞬間に「分からない」と言えないわけです、授業が止まっちゃうので。横の友達に「これ、分からないんだけど教えて」ということも、「うるさい」と言われちゃうので聞けないわけです。だけど、AIドリルを使っていると、別に誰かが「先生、ここ分からない」と言ったところで誰の進捗も止まらないので、普通にみんなが勉強しているさなかに「分からない」とか「教えて」と、どんどん子供たちの主体的な態度というのがあふれていくようになりました。なので、一見すると、実は麴町中学校で繰り広げられている授業も、学級崩壊しているんじゃないかというぐらい騒々しかったりするので

が、それでいて子供たちの学習進捗というのがものすごく速くなったというようなことが起こりました。

そのような中で学習効率というものはこちらなのですけれども、今回、経済産業省さんとやらせていただいたのは 2018 年度の 2 学期、3 学期でしたので、数学の時間として 1 年生は 62 時間、単元数としてあったのですが、それを 34 時間で終わらせることができたという結果になりました。結果として、新しく 28 時間の時間を生むことができたので、この青い部分が S T E A M 教育というもので 10 時間を使いましたし、また、この 13 時間を次学年の勉強に充てることができたというのが 1 年生になります。これは各学年大体同じような結果になって、3 年生だけは受験が待っていたので S T E A M 教育をやる時間はなかったもので、全て受験対応という形で時間を使ったような形になっています。

また、そのときに、学習効率だけではなくて学習効果はどうだったのかというのがこちらになるのですけれども、もともと麴町中学校は発展クラスと基礎クラスという 2 クラスにずっと分かれていて、このときは基礎クラスだけに Qubena を導入しました。基礎クラスの子たちが発展クラスの子たちに偏差値でどれほど追いつくことができたのかという形で学習効果を測らせていただき、それをまとめたのがこちらのグラフになっています。1 年生で考えますと、比例と反比例で大体偏差値で 5 ちょっとぐらい基礎クラスの子たちが発展クラスに追いつくことができた。平面図形も大体同じぐらい。2 年生に関しては、一次関数で偏差値で 2 ぐらい、その次で 1 弱ぐらい追いつくことができた。3 年生になると、むしろ最初の単元では少し開いた、次の単元でようやく少し縮まったというような結果が現れたというのが学習効果になります。算数、数学というものは学年進行とともにどんどん分からないポイント、抜け落ちているポイントというのが増えていくのですね。ですので、このような個別最適化というような形の教育を施したときに、そのように学年が上がるにつれてそれを取り戻すのに時間がかかっていくということもまたここで同時に分かってきたことになります。

それでは、指導の個別化ということと、もう一つ、学習の個性化ということ、公正な個別最適化ではこの二つだというお話をさせていただいたのですが、学習の個性化としての例がこちらになります。こちらは、麴町中学校で余った時間によって子供たちに対話的で主体的な S T E A M 教育をやらせていただいたことです。このときはドローンとか 3 D プリンターとかロボットを使いながら、数学の時間を縮めたので、ちょうど子供たちが勉強した数学の知識が最先端技術の中でどう生きていくのか。また、例えばドローンであれば、ドローンを使ったときに、その精度を見たときに、その子たち一人一人はそのドローンで未来の中で何をやる、君た

ちが本当にこの後取り組みたい社会課題は何なのかということを開きながらテクノロジーと数学の意義を学ぶ、そのようなことをやっていました。

また、2019年度、昨年度は数学は引き続きやりつつ、今度は英語に関してもやらせていただくことによって、英語の時間も短縮することができたので、それによって、英語と数学をくみ合わせて、そこにテクノロジーを乗せたようなSTEAM教育ということも麴町中学校でやらせていただきました。このときは、SDGsの掲げる「質の高い教育」は何なのかというテーマを子供たちに与えた上で、日本の教育はどうなっているか、世界の教育はどうなっているかということ調査しながら、全て子供たちが英語でアンケートの質問を考えて、全世界の子供たちにアンケート調査を行い、そこを統計処理する、数学の知識を使って、その課題を抽出するというところまでを子供たち一人一人がやった上で、子供たち独自に、質の高い教育ということの世界に届けるためにはどうしなければいけないのかということ考えたということをやらせていただきました。

ですので、学習の個性化というところですごくテーマになるのは探究学習なのですね。これは決してSTEAMということだけが大事という話ではなく、子供たち一人一人の自分の課題というもの、自分がこの社会の中で何に興味を持つのか、それに対して自分がどう探究していくのか、この時間をいかに埋めるのかというのが学習の個性化でありますし、ここは学校独自、先生独自にこれからは無数にこのカリキュラムはつくっていく必要があると感じています。

こちらはQubena英語による学習効果としてまとめさせていただいているもので、授業時間数としては大体10～13時間ぐらい普通はかかるところ、8時間ぐらいで修了することができたという形で学習効果としてまとめさせていただいており、また、偏差値比較としても有意な結果が出たということをごちらにまとめさせていただいています。

現状、このQubena、コロナ禍もありまして、全国いろいろな学校にどんどん普及させていただいています。

その中において、私が今回申し上げたいことをまとめますと、ICT活用をすることによって、まず子供たちや先生に余裕がある時間を生む、そのためのソフトウェアの活用をしっかりと行う。そうすることによって生まれた時間によって、子供たちにちゃんとした学習の個性化を図るような探究学習を行う。この二つを実現するというのが、GIGAスクール構想が本質的に求めている、本質的に目指してきた、そのようなものになると考えております。

そのために今回進言させていただきたいのは、この三つ。教科学習の効率化のためのソフトウェアということはどう考えていくのか。また、それによって生まれた余剰時間で子供たちに

どのような課題解決型の学習、STEAM教育をやっていき、かつ、学校設備も整えた中でどう充実させていくのか。ここを重点的に考える必要がありますし、また、このような大改革をしていく上では、どうしても学校教員にタブレットとかソフトウェアを渡していただくだけではすごく難しい話になりますので、いかに外部人材を活用していくかということが挙げられます。現在、私自身、複数の自治体で教育CIOという形でこのような取組をさせていただいていて、このような制度が分かっている、かつテクノロジーが分かっている、後は現場に対してEdTech、Educational Technologyを導入したときにどうなるかという実証までできる、このような人材をいかに民間から登用していくかということがすごく鍵になってくるかなと思っています。

急ぎ足になってしまいましたが、御清聴ありがとうございました。

○藤田教育長 ありがとうございます。大変現在の取組、それから将来に向けてのということで、目からうろこなところがたくさんございました。ありがとうございます。

それでは、引き続きまして、西野様から「誰ひとり取り残さない多様な学びの場をめざして～公設民営「フリースペースえん」の取り組み～」をテーマにしてお話を賜りたいと思います。西野先生、よろしくお願いします。

○西野氏 よろしくお願ひします。西野といいます。

私は「誰ひとり取り残さない多様な学びの場をめざして」ということで、公設民営型のフリースペースの取組を中心にお話しさせていただきます。

今のICTを使った学びというのは本当に大切だなと思います。

私、この仕事をするきっかけになったのは、6歳の小学校1年生の男の子が「僕、もう大人になれない」と、目に涙を一杯ためて訴えた。1か月足らずで、みんなが行ける学校に行けなくなった、その子の切ない涙と、中2の女の子がお母さんの無理心中に巻き込まれた、こんな事件をきっかけにして、一緒に生きていく場、学ぶ場をつくろうということをやってきました。約30年前に「フリースペースたまりば」という場所を開いて、不登校、ひきこもりの若者や、いろいろな障害のある子どもたちとともに学ぶ場づくりをやってきました。

その中で、川崎市では98年から「子どもの権利に関する条例」の策定が始まりまして、私、調査研究委員会の世話人の一人として条例づくりに関わります。

その条例が2000年の12月に出来上がりました。その条例の具現化を目指して、夢パークをつくろうということになりました。2003年にオープンして、今年で17年になるのですが、こ

ここで特徴的なのは、冒険遊び場（プレーパーク）と不登校児童・生徒のフリースペースえんが同じ敷地内にあるということなのですね。

こんなふうに外観、それからスポーツ広場もあります。朝9時から夜9時まで、毎日12時間開いている。年末年始の休みと月1回の点検日しか休みがないプレーパークがあります。

子供たちがごろごろしていても怒られない、飲食もできて、ゲームもできて、ゆったり過ごせるような居場所としての「ごろり」、それから音楽スタジオなどもあります。

今、学校教育というのは、「やりたい」ということより「やらねばならない」ことが優先されているように思います。周りからの評価が気になって、自分が何がしたいのかが分からない、そんな子供たちが増えているような気がします。上から与えられることをこなすのではなくて、自分で問いを立てて、仲間と話し合いながら自分なりの答えを見つける、そういった取組が実に必要なのではないかと思っています。

やってみたいことに挑戦できる環境づくり。子供たちは本当にいろいろやりたいことがあるけれども、やりたいということがやれない。例えばこうやって木に登りたいんだから登らせて。運悪く、おっこって骨折しちゃった。しょうがないじゃん、俺がやりたかったんだもん。けがと弁当、自分持ち。自分で引き取るから自分の責任だ。あんたのせいにしないから禁止にしないでよという子供の切実な願いを聞いて、教育委員会とつくってきた場所です。火も水も土も工具も使えます。

今の教育で大事なのは、安心して失敗できる環境をどう用意できるか。けがを恐れて、失敗を恐れて、今いろいろなことに挑戦しない子供たちがすごく増えました。危ないからやめなさい、あんたには無理よ。でも、やってみたらいいじゃない。そして、それを重ねながら、あっ、こんな失敗しちゃったけど、これを乗り越えていく力、受け入れる力を育む。ひきこもりの人にも34年間関わって、その支援に携わってきますと、0・100タイプという人も結構いるなと気付かされる。完璧じゃないと、0か100かで、100できない自分を受け入れられない、そんな若者たちの生きづらさにも出会ってきました。できないということも受け入れられる力、実はこれもととても大切なんだということに気付かされます。

五感を使って、群れて遊ぶ。快・不快を手に入れる。実は遊びが持っている力というのは非常に大切なことだなというのを実感しています。遊びが持つ、育む力の中で非認知能力。数値化されない、人間として生きていく力。目標に向かって頑張る、人とうまく関わる、感情のコントロールができる、こういった力というのは、実は教科書を読んでも手に入らない。この辺りが、ICTを併用しながらも、実際に子供たちが対面で群れて遊ぶ環境づくり、この両面が

なくては教育の中では成り立たないのではないか。

私たちの取組の中で、「フリースペースえん」という、川崎市子ども権利条例をもとにつくった公設民営型のフリースペースがあります。ここの特徴は、どんな障害の子も受け入れる。適応指導教室と言われるような、全国に広がった6割ぐらいの公的機関がやっている不登校対策は、なかなか障害のある子たちの受入れが十分ではない。発達障害はもちろん、知的障害、それから精神障害で統合失調症の人も鬱病の人も通ってこられるような環境を用意する。それから、車椅子で食事介助の必要な人も一緒にいるインクルーシブな場、みんながいろいろな障害を抱えながら一緒に生きていける場をつくる。ちょっとやんちゃな子供も一緒にいられる。実は、これは教育が成り立ちにくいといって敬遠されがちなのですが、異質・異年齢が多様に混ざり合うと、とても安全で安心して豊かな学びの場になる。人間ってこれだけ多様なんだということに出会うと、生きていく力、学ぶ力がどんどん広がるということを子供たちから教えられてきました。そういう場所は、貧困世代が多くなる中で無料でなくてははいけない。

そして、高校進学後も利用できるということが大きな特徴でして、こんなふうに、小学生、中学生はもちろん、小学生が今どんどん増えています。公的施設は小・中で支援が終わってしまいますけれども、実は不登校の子がやっとの思いで高校に行けても、その高校を卒業できるまでの対応をどこがやってくれるかというところ、ここがすぼんと抜け落ちてしまう。ここもしっかりと関わる。そうすると、ここで一緒に関わりながら、学習の支援をしながら一緒に活動していくと、友達ができにくい子も何とか卒業に、中退防止へとつながる。そういった異年齢・異質で混ざり合う場が大事だなと。

気が付いてみると、こんなふうに障害の診断を受けているとか手帳を持っている人たちが約4割まで広がっている。こういう人たちの行き場がない、そして診断名が多く広がる社会になってきたなというのが実感です。

私たちの場所は、生きていだけでオーケーだよ、これをちゃんと伝えていこうと。今まで不登校施策は、不登校は駄目だ、問題行動だと言われてきた。でも、文科省も態度を変えました。私も文科省の委員を4年間続けてきましたけれども、不登校というのは駄目じゃないということをしつかりと局長も言いました。多く勘違いされるのは、不登校は勉強嫌いとか学校嫌いの子だと思われている。そうじゃない。学校が安全で安心して楽しく学べる環境だったら、ほとんどの子は学校に通いたい。ここがしっかりと担保されなければいけない。だから、脅しのような叱咤激励で「おまえ、このまま将来なくなるぞ」なんて言わなくていい。大丈夫という安心の種をまくことが大事。学校以外の場で学び育つ選択肢を増やしていくことが大事なん

だと。

私たちが大事にしてきたのは、毎日のお昼御飯作りです。一緒に御飯を作って食べる、これだけで子供たちは元気になる。暮らしを取り戻すということ。

そして、カリキュラムに縛られない。今まで上から与えられてきた、子供の時間を奪いながら。自分は何をしたいのかということに気付くためには、何もしないということも保障していく。

個別に、一人一人に合った、その子のペースに、その子の背景に根ざした学びの場をいろいろとやっていけるということが大事なのではないかなと思います。

様々な講座がありますが、今は説明する時間がないので、ここを大事にしたい。学校外の多様な学びの中に、今、発達障害と呼ばれる子が非常に増えました。この子も学校一の問題児と言われて、行き場を失いました。で、困った、困ったと言われる。この子、本当に多動でした。これだけ多動だと教室には座ってられない。だけど、こういう環境を用意する。好きなところを走り回っていいよと。スタッフがよく気にしていたら、この子、色を使うとすごく面白いということに気付きます。そうか、この子は色に興味があるんだ。じゃあ、1万平米、3,000坪あるから、好きなところを走り回って、ペンキで色を塗っていいよ、木っ端を集めて。でも、生木に塗らないで、こっちの建物には塗らないでねとお話しながらやっていくと、この子、生き生きとやる。そうすると大人たちは、何だ、面白いね、将来アーティストになるんじゃないの。今まで困った子だと思っていた大人たちが、あっ、この子は困っている子だったんだ、学校不適応児というのは大変失礼なラベリングだと。一人一人の子供に対応できていない、適応できていない学校教育の課題がここに詰まっているんだと。だから、教室の壁とか机とかにとらわれなくて、一人一人の背景やニーズに合わせた学びの環境を用意していけば、この子の一番強いところに光を当ててあげれば、この子の力が伸びていく。この子は、この間もアーティストとして表彰されていました。

そのうわさを聞きつけて見に来たのが文部科学大臣でした。現役の下村大臣、ここに来られて、大変感動して、すぐに記者発表されました。「既存の教育では収まり切れない子供たちが育っていく可能性がある」「教育をより柔軟で、多様な発想に持っていかなければならないと改めて思いました。未来の学校の在り方のモデルの一つがここにある」「未来のエジソン、アインシュタイン、アーティストはこういうところから生まれるんじゃないか」。これはもちろん大臣の主義主張もあつてのことだと思いますけれども、こういった学びの場を、実は私たち、いろいろなところにつくっていくことができるのではないかと思うんです。

学校とフリースペースの連携の仕組みは、私たち、14年前から県教委と市教委と一緒に連携協議をやってきました。もちろん、こういった学校外のフリースクールでの学びは、過去、公設民営になってから17年間全て学校の出席として扱われています。また、県の教育委員会から学校の先生が研修で派遣もされています。

それから、9月19日、川崎会場でまた不登校相談会がありますけれども、教育委員会とNPOと一緒に不登校の相談会や進路情報の説明会を開きます。今年はコロナなので、オンラインも使って、パネルディスカッションで不登校経験者による体験発表もしていく。不登校のパンフレットも一緒に作る。私の言葉もパンフレットに載っていますが、こんなふうにして、学校教育と民間NPOと一緒にやるということですね。

今、私たち、子供から伝えられてきたことは、「父さん、母さん、先生、学校に行けない私は駄目ですか。生きている価値はないですか」、これをずっと問われてきた。私がこの仕事を30年ずっと続けてきながら、還暦を超えて今なおまだまだやらねばならないと思っているのは、救えなかった命が何人もいるからなのです。たかだか学校に行けないだけで子供たちは命を絶っていきます。この自死をどうやって止められるか。親たちの不安をどうやって解消できるか。「生きてるだけでオーケーなんだ」という、子供たちの存在を根づかせていけるような取組を学校と地域と家庭が連携してつくっていかねばいけない。すごくシンプルなことに出会います。「生まれてくれてありがとうね」「あんたがいてくれて幸せだよ」、このメッセージがしっかりと学校教育の現場、地域で、家庭で子供たちに届いていけば、何ということなく子供は自分で社会的な自立に向かって歩き始められる。でも、このメッセージが届かないから、子供たちは途中で心折れたり、ひきこもってってしまうんだと。

だから、「大丈夫」を手に入れよう。何だ、こんな私でも大丈夫じゃん、俺でも大丈夫じゃん、こういうものに包まれたときに自然と欲が湧いてきて、自分の頭で考えて、自分の足で歩き出すんだということを教わってきた。

だから、社会全体で子供を支える仕組みを考えよう。街の至るところに学びの場があってもいい。学校が豊かな学びの場であってほしい。でも、どうしても学びの場を手に入れられない、居場所にならない子供たちは生涯学習の視点に立ってもいい。地域の中で、家庭でも学べる環境を用意しよう。子供の育ちには無駄に見える時間とか隙間も大事なのですね。そして、大人が肯定的なまなざしを持って関わってくれること。今日見ていただいたように、子供の好奇心の芽を摘まない。それはICTを使っても、こういった実際の遊びを通して、私たちが「これ、面白いね」といったときに、この出会いのきっかけをちゃんとものにできる力を手に入れ

ていけるようにする。子供の力を信じて、子供が自ら伸びていこうとする邪魔をしない。子供のチャレンジを社会全体で応援できるような、こんな取組が、学校と地域が連携して、学校外の学び場もしっかりと認められる中で実現していったらいいなと心から思っています。

聞いていただいて、ありがとうございました。終わりにします。

○藤田教育長 西野先生、ありがとうございました。

ただいま、お二人の講師から大変限られた時間の中、貴重なお話を賜りました。これからのICT化による公正な個別最適化というお話、それから一人一人に応じた多様な学び、主体性を育むというのには多くの共通点といいでしょうか、教育の目指すところが示唆されたかと思えます。

それでは、これより協議、意見交換に入りたいと思います。「新たな東京の教育の在り方」に関しまして、ただいまのプレゼンテーションの内容も踏まえ御意見を賜ればと思いますし、また、お二方の講師にもう少しお伺いしてみたいとか、御質問でも結構でございますので、御意見等ございましたら、よろしく願いいたします。

冒頭、知事からお願いします。

○小池知事 まず、プレゼンテーション、ありがとうございました。全く違う切り口かと思いますが、子供の力をいかに伸ばしていくのか、多様な子供たちがいる中で、どうやって力を一人一人引き出すかということでは共通項があったかと思えます。

また、ICTの活用によるオンラインの授業が、この間、いや応なしに迫られて、都でもかなり進めておりましたけれども、コロナ禍における学校教育において、そんなどころじゃ間に合わないというぐらいオンラインでの授業の実施について、小学校であれ、大学であれ、その体制構築に迫られたわけであります。そういう中で、子供たちへの教育の仕方も、対面の教育とオンラインの教育は全く違うと思うのですが、逆に私が聞きましたのは、不登校の子供たちがオンラインの授業にはむしろ戻ってきたよという話も聞いたりもします。それから、一人一人同じ学びのスピードというよりは、タブレットを使って個別な対応をすることによって教育の質が上がっていくなどなど、現場のお声も聞かせていただきました。

また委員の先生方からいろいろ御意見や御質問もあろうかと思えますので、まずは本日のプレゼンテーションに対しまして御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

○藤田教育長 知事、ありがとうございました。

それでは、教育委員の皆様方から御意見を賜りたいと思いますが、いかがでしょうか。

○遠藤委員 神野さん、西野さん、ありがとうございました。

これからの東京の教育の在り方ということでお話をしようと思いますが、西野さんのお話を伺っていると、私、昭和 20 年代に東京の公立の小・中学校を過ごしたのですけれども、特に 20 年代の小学校あるいは中学校というのは「えん」みたいなものだったのですよね。あらゆる子供たちが一緒にいて、正にインクルーシブだったのですよね。それがいろいろ社会・経済が発展していく過程の中で分かれていって、不登校の問題等が起こってきたのだと思いますが、しかし、非常に貴重な取組だと思います。

これからの東京の教育の在り方という観点では、ポストコロナという非常に大きな課題を抱え込んでしまったのですよね。私がかねてから四つの「化」への対応ということ。一つは国際化であり、2 番目が ICT 化であり、3 番目が少子高齢化、そして最後に温暖化。この四つの「化」への対応が、これからの子供たちが教育を受けて、課題解決に向かっていかなければならない方向と思っています。

ポストコロナということで、それぞれが大きく中身が変わってきつつある。例えば国際化というのは、国際的水平分業の進展の果実を受け取る立場だったのが、日本の子供たちが担い手になっていかなければいけないということ。それから、ICT 化については、かねてから申し上げているのですけれども、I と T の間にある C（コミュニケーション）が非常に大事だということ。そして、少子高齢化は、どちらかという生産年齢人口の減少に伴う稼ぎ手の減少というようなことで問題点を捉えがちですけれども、それよりも、長い間積み重ねてきた富の分け前の人数が減ってくることによる、子供たちが精神的にスポイル化される。社会が豊かに、ただ、コロナによってこれがまた変わってくるのではないかなという気がしております。子供たちの心をスポイル化させないことが大事なのではないかなと。そして、温暖化の問題は我々の世代の責任です。我々が生きているうちに、未来の子供たちが温暖化のマイナス面を、被害を受けないようなことを何ができるかということを考えていかなければいけない、そう考えております。

以上でございます。

○藤田教育長 ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

○秋山委員 神野様、西野様、貴重なお話ありがとうございました。多く重なる部分があるかと思えます。

昨年度第 2 回の総合教育会議でインクルージョン教育、特別支援教育を取り上げられました。

とても重要な会議だったと思います。これからの東京の教育の在り方を考えるに当たって、まずは子供たちにこれから望む姿を考える必要があると思います。

私は、その一つとして、多様性を知り、認め合う子供ではないかと思います。学校現場では、授業内容についていけない、同じ行動ができないということで通常学級から特別支援学校を勧められることもあり、インクルージョン教育が逆行していると感じることもありました。そこで、1人1台のタブレットを活用した指導は、発達や学習に課題のある子供も同じ教室で、同じ学校で、同じ地域で教育を受けられるというメリットがあります。

しかし、その一方で、その運用には課題があります。教員のICTのスキルの問題。教員への負担を軽減するためにも、専門職が必要だと思います。既にモデル校である都立三鷹中等教育学校では、専門職の存在を重要視していました。

もう一つの課題は、自治体によるネットワークセキュリティポリシーの違いです。個人情報の絡み、外部のネットワーク禁止でオンライン授業ができないという声も聞こえてきます。これまで制限をかけてきたネット環境を開放していかなければ、せっかくの機器が宝の持ち腐れになるかもしれません。

最後に、学びの形態が変わると同時に、学校の役割、在り方も再考するべきだと思います。発達障害や不登校ぎみだった子供、またその保護者も、このコロナ禍の長期休校中に明るいきな表情になりました。それから、分散登校のときに落ち着いていた子供が、一斉登校になったときに調子を崩しました。今回のコロナ禍の経験を分析すれば、丁寧に指導できる教育環境が見えてくるのではないかと思います。そして、今、2月期が始まっています。子供たちに「学校はどう」と聞くと、「楽しい」と答えます。何が楽しいかと聞くと、友達と遊ぶこと、それから部活が楽しいと答えます。子供たちが多様性を認め合って、協調性や助け合う実体験は学校においてこそ全ての子供たちに保障されているのではないかと思います。

これから、これらの実現に向けては、やはり人材が必要です。教育が全てを抱え込むのではなく、外部の人材、医療・福祉・教育などの関係機関を、これもICTを活用できるように環境を整えていただければ連携が速やかになるのではないかと思います。

以上です。

○藤田教育長 ありがとうございます。

では順番で、北村委員、お願いします。

○北村委員 神野さん、西野さん、どうもありがとうございました。それぞれ違った角度からでしたけれども、それぞれ非常に胸に届いてきたお話でした。

先ほど知事も、二人の話に共通点が非常にあるというお話がありましたが、私も、実は共通したところが非常に大きなお話だったなと思いました。

3点あるのですけれども、一番大きな話としては、今、SDGs という大きな目標に向かって、誰一人取り残さない社会をつくる。でも、そのために必要なのは、正に公正な社会の実現で、公正な個別最適化というメッセージは非常に大事なメッセージだなと感じました。

2点目ですが、お二人とも実は探究的な学びの重要性を、テクノロジーを生かして探究的な学びを実現したり、あるいは子供が本来持っている興味・関心を生かして、自己肯定感を持ちながら、課題意識を持ちながら探究的な学びをする。これは、テクノロジーを使おうが、「えん」のような場で自由に学ぼうが、探究的な学びということが非常に大事だと。ただ、こういった探究的な学びを推進するときに、どうしても格差のリスクというのがあると思います。特にテクノロジーを使ったり、あるいは探究的な学びというと、どうしても家庭でいろいろな議論をしている御家庭のお子さんと、なかなかそういう場を持っていないお子さんとでもとの出発点が違ったり、家庭環境が違ったりする中で、いかに全ての子に正に公正で個別最適化を図れるかということが大きな課題になるのかなと。

3点目は、お二人のお話で共通しているなと思ったのが、既に指摘もありましたけれども、学校と地域や社会との協力関係の重要性。そのために、外部の人材や外部のリソースをいかに活用するかということだと思います。我々も今、働き方改革ということで、学校の先生方が非常にお忙しい、そこをいかに働き方改革を進められるかというところで、新しいことをやると、どうしてもそこに先生方の負担というのが増えてしまいますが、地域や社会と連携して外部の人材やリソースを活用することで、それぞれ先生方の個別最適な働き方というのができないかなと期待しているところですので、是非学校と地域、社会、企業、そういったところがこれからはますます連携を深めていっていただきたいなと思いますし、教育委員会としてもそれをサポートすべきだなと感じております。

一つだけ質問、もしお時間があればですが、Qubena の神野さんのお話で、特別支援学校などとも連携ということがありましたが、障害を持った子がテクノロジーを使うときに難しさが無いのかなというのがちょっと疑問としてありましたので、どのようなことができるのか、もし後ほどお時間があれば少し御紹介いただければと思います。

最後一言だけ。今申し上げたようなことをやるには、知事がおっしゃったように、未来への投資が欠かせないと思います。これは今すぐ成果が見えなくても、未来への投資を我々は積極的にやるべきだなと強く感じております。

どうも本当にありがとうございました。

○藤田教育長 ありがとうございました。

それでは、神野様、お願いいたします。

○神野氏 特別支援教室などでの実績ということでいいますと、複数の自治体でそのような形でやらせていただいている事例がございます。障害ということを一くくりにするのできないので、全ての子供たちに対してそれができるということは申し上げられませんが、一方、例えば耳の聞こえない子だったりすると、先生の言葉が聞こえない一方で、AIドリルみたいなものはすぐく入ってきやすくなるのですね。というような形で、障害によってはICTを用いたほうがいい子供たちもいますし、一方で、AIドリルは、例えば目が見えない子にとっては何もできない教材になりますので、そんな子に対しては本当に無力なものになっていきます。ですので、その子たち一人一人の状況を見つつ、使う、使わないということを判断するというところが大きく必要になってくるのではないかなと思います。

○藤田教育長 ありがとうございました。

それでは続きまして、宮崎委員、お願いします。

○宮崎委員 心に響く発表をありがとうございました。

今、あるべき姿については、いろいろな形で結構議論はされてきたと思うのですが、もはやゆっくり話している段階は過ぎ、もう現実の方が先に行っていて、今やそれをいかに具体的に実行しなければいけないかという段階に多分入っていると思うのです。それもコロナ禍で、好む好まざるにかかわらず強制的に進めなければいけないというような事態になっているときに何をすべきかということではないかと思います。今のお二人のお話からも浮かび上がってきましたし、冒頭に御紹介いただいた有識者の皆さんの意見の中で「修得主義」という言葉が出る。あるいは、子供たちのアンケート調査の中で、飛び級とか、できるものはばりばり勉強したいとか、そういう話が出てくる。そういうことを考え合わせますと、横並び学年主義じゃなくて、単位制であるとか、個を伸ばすというのだったら、個が持っている特徴をいかに引き出して、そこを伸ばすにはどういう仕掛けをすればいいか。一緒にたにした教育では難しいので、いかにそれを個にするか。そのためにICTがいかに有効であるかということではないかと思っております。ですから、具体的には飛び級で、飛び級には必ず留年をセットにしないといけないと思うのですが、習熟できたらそこでと。実は大学ではもうこれがある意味できていまして、ディプロマポリシーを実現できる能力を各分野ごとに単位として、認定された学生だけ卒業で

きるということになっているわけですが、そういうことをどこまで下げていけるのか。

ただ、初等中等教育と高等教育を考えますと、初等中等教育はまたちょっと使命が違い、ナショナル・ミニマム的な素養を全ての児童・生徒がどう身に付けるか。また、教育の中の「知」「徳」「体」の「知」はICTで、今回およそ半年にわたるリモート授業などでも、「知」の部分は実行可能だということが証明されたのではないかと思うのですが、「徳」「体」の部分、人間関係とか、コミュニケーション能力とか、社会性とか、こういうことをいかに育てていくかというのは遠隔だけではなかなか難しいというところがあるのではないかと思うのです。そのアナログ部分というのでしょうか、これが正に西野さんがやっていたらしゃるような分野ではないかと思うのですが、低学年にいけばいくほどそこが大事で、おしくらまんじゅうとか、駆けっこで足の速い子、遅い子とか、それぞれに得意な分野があり、皆で協調していく大切さを学ぶ、そういうところが大事で、そこをどう担保していくのか。ただ、学年が上がっていくと、今度は神野さんのICTのような部分がいかに大事かということで、これは具体的、個別的、教育の方も個別な提供というのをもう早速に始めていく時期ではないかと思っている次第であります。

以上です。

○藤田教育長 ありがとうございます。

それでは、山口委員、お願いします。

○山口委員 ありがとうございます。もう大体出尽くしているとは思いますが、私の方から2点だけ。

子供たちがこれから生きていく未来に向けて、恐らく資質・能力も変わってきていると思うのですが、それは恐らく教員も同じだというふうに、お二人の発表を聞いて感じました。これからの教員がどういう資質・能力を持って、どういう人を育てていくかといったところが一つ肝になるかなというのを感じました。

それからもう1点、西野さんに、これは時間がないので無理だと思うのですが、後で個人的にもお伺いしたいのですが、恐らく家庭、例えば私が親だとすると、学校に行けないということではなぜ不安を感じるかといったら、子供の未来ですね。子供のうちは楽しくやらせてあげたい、ここで大丈夫だと思っても、大人になった途端に厳しい社会が待っているのではないか、だからここで我慢させたいという、そのところで、長年やってこられて、つなぎというのですかね、卒業された子たちが社会にどうやって適応なさっているのか、そういったところを公表されると、もしかしたら地域、社会、そして家庭が少し安心できるのかなというのを感じま

した。

私からは以上です。

○藤田教育長 ありがとうございます。

西野先生、お願いいたします。

○西野氏 今の御質問は、まず、これから先の選択肢がどうあるかということ、それから未来がどう開かれているか。これだけやりたいことをやれるという環境をしっかりと手に入れた子は、大丈夫だと思えると、ほとんどの場合、みんな高校に行っちゃうのですね。で、そのまま大学や就職していくわけです。でも、それが別にゴールではないです。高校に行けますよという支援だけだと、そこではまた次の問題が生まれてきます。まず、この自分で大丈夫だということから、今の学校教育の制度、高校進学でも、サポートしていけば社会には非常に出やすくなる。だから、まずは親の安心をどうやって担保できるか。親を支えるということがとても大切になってくると思います。学びが多様であるということが大事だと思っています。

○山口委員 ありがとうございます。

○神野氏 続きまして、宮崎委員がおっしゃられていた履修主義ということに関して、多分そういう意味だとは思いつつ、一応明言化するという意味において、義務教育段階においては、修得主義と下限としての履修主義、この両方をハイブリッドさせるべきだと私は考えています。というのも、義務として来ている子供たちが留年などすることによって卒業ができない、いつまでたっても、自分がある概念を修得しない限り学年が進まないという事態は恐らくなかなか納得解が得られないだろうと思っておりまして、義務教育段階においては少なくともそのハイブリッドが必要。その後の選択というような形で高校ですとか大学となったときには、また新しい議論ができるのかなとは思っています。

○宮崎委員 そうです。小・中の義務教育段階はもちろん横並びでいいと思うのです。で、ナショナルミニマム的な能力をつける。高校です。高校以上がそうだろうと。

○藤田教育長 ありがとうございます。よろしいでしょうか。

それでは、議論も尽きないところではございますけれども、お時間の関係もございますので、意見交換につきましてはここまでとさせていただきます。

それでは、最後に知事から締めくくりで。

○小池知事 ありがとうございます。神野さん、西野さん、本当にありがとうございました。いろいろと具体的なヒントを頂戴いたしました。

これから世の中の変化はあまりにも速い。それは子供にとっても速いし、教える方にとっても速いし、親にとっても、これまでの目安というのが、今、「新しい日常」で大きく変わってきている。ましてや、AIやICTの日進月歩の進化というのはすさまじい。これらのことを教育の現場でどう落とし込んでいくのか、子供と学校の先生と親と、そしてまた我々行政と、そこがしっかり方向性を共通で持っていないと、子供たちも混乱するし、親たちも大丈夫かと心配をしてしまうことになります。

また、インクルーシブな教育ということでは、これまで東京都もいろいろと努めてまいりました。子供にとって、一人一人が、「あなたがいてくれて幸せだよ」ということをみんなで届けるという、その例を示していただいていることに感謝申し上げたいと思います。

また、AI教育は本当に大変なスピードで進んでいて、また、それに先生がついていくのが大変じゃないかなと思ったりもします。こういう流れの速いところを、神野さんにはまた途中経過なども教えていただければというふうにも思っておりますので、今日は時間が短かったですけれども、今後ともよろしくお願い申し上げます。

また、西野さんも、これからも一人一人の子供たち、インクルーシブな教育の場を磨いていただければと思っております。

本日は誠にありがとうございました。

○藤田教育長 ありがとうございました。

本日は、神野様、西野様には大変お忙しい中本会議に御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。お二人のお話によりまして、より活発な意見交換とすることができたと思います。私どもも、本日の議論を受けまして、今後の検討を更に進めていきたいと思っております。もう実行段階ということもありますので、スピード感を持って行きたいと思っております。

次回の総合教育会議の日程につきましては、調整の上、改めて御連絡を差し上げたいと存じます。

それでは、以上で本日の会議を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。